

社会認識形成を意図した社会科入門期における地図指導の理論 - 小学校第3学年「身近な地域や市の様子」の学習に着目して -

Theory of Map Guidance in the Beginning Period of Social Studies Intended to Form Social Recognition : Focusing on the Learning of "States of Familiar Areas and Cities" in the Third Grade of Elementary School

植田 真夕子* 米田 豊**
UEDA Mayuko KOMEDA Yutaka

本稿では、子どもの地図活用力の構造が「描図力」と「読図力」から構成されていることを提案する。この構造に基づき地図活用力を鍛えることで、地域の特徴や立地条件をとらえる視点となる社会的な見方が習得される。この社会的な見方は、社会事象をとらえる際に活用される視点で、子どもの社会認識形成を図るためには不可欠である。地図活用力を育成することで、子どもの社会認識形成が達成されると考える。また、社会科入門期の地図指導に焦点を当てた実践をとおして、子どもの地図を描くステップを明らかにした。各段階で、子どもに地図の利便性や地図の構成要素に気付かせることができ、子どもの地図活用力が一層高まることが明らかとなった。

キーワード：社会認識形成, 地図, 地図活用力, 社会科入門期

Key words : social awareness formation, map, map utilization, introductory period of social studies

1 新学習指導要領の改訂を踏まえて

2020（令和2）年4月から完全実施となった小学校学習指導要領では、第3学年から地図帳の活用が求められ、教科用図書として地図帳が配付された。多くの子どもが、フルカラーの地図帳をめくるにつれ、新しい教科である社会科への期待や関心を高めていることだろう。「小学校学習指導要領解説社会編」（以下、「社会編」）においても、第3学年から配付されることとなった地図帳は、「地図を効果的に活用することにより、位置や空間的な広がりに着目して社会的な事象を捉える見方・考え方を養うことができる教材」¹⁾と位置付けている。

また、「社会編」の第3学年の内容においても、「観察・調査して必要な情報を集める技能、地図などの資料から位置や地形、広がりや分布などを読み取る技能、地図記号を使って、調べたことを白地図などにまとめる技能を身に付けるようにすることが大切である。」²⁾と述べられている。問題解決に向けて必要な情報を集めたり、読み取ったりするためには、社会事象を捉える視点である社会的な見方を働かせることが不可欠である。

このことから、地図の活用を意図的に学習活動に組み込むことで、子どもの社会的な見方を育成することができる。例を挙げてみると、地図を活用することで、対象とする地域の位置関係や距離関係を正確に捉えさせることができる。また、土地利用図や分布図といった主題図を活用することで、地域の特色を把握させることができる。

つまり、地図の活用を学習活動に組み込むことで、社会事象を捉える社会的な見方が育成されるとともに、子どもの社会認識が形成される。加えて、地域の特色を把握させる学習活動は、子どもに共通点や相違点を発見させるために、複数の情報を比較させることをうながし、子どもの思考力も育成される。

小学校第3学年から地図帳が配付されることになった背景の一つに、グローバル化への対応や地理情報リテラシーの育成に向け、地図活用力の向上がより一層めざされたことがある。近年、GISを活用した授業実践が多く見られるのも、その要望に応えるものであり、子どもの学びが深まるといった効果が実証されているからであろう。加えて、各教科において情報活用能力の育成がより一層重視されるようになったことに要因がある。

文部科学省は、この情報活用能力を「学習の基盤となる資質・能力」³⁾と位置付け、「必要な情報を収集、整理、分析、表現する力」⁴⁾もその一つとし、教科横断的に育成されることを学校教育活動に求めた。

社会科教育において「必要な情報を収集、整理、分析、表現する力」を育成するためには、資料が大きな役割を果たす。子どもの主体的な学びを促すために、観察や見学をとおして情報を収集する学習活動も多く展開されている。さらに、学習課題を設定したり解決したりするために、資料が多用されているのも事実である。

社会科の授業で取り扱っている資料は、統計資料、年表、現物資料、地図等、様々な種類がある（表1）。

* 弥富市立日の出小学校

令和2年7月17日受理

** 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 教授

表1 社会科教育で活用する資料の種類⁵⁾

資料の種類		資料の具体
①	現物資料	実物、標本、模型、インタビューなど
②	メディア資料	CD、録音テープ、ボイスレコーダーなど
	映像資料	DVD、絵、写真、スライドビデオテープなど
③	地図資料	白地図、土地利用図、分布図など
④	統計資料	円グラフ、棒グラフ、折れ線グラフ、統計表など
⑤	文字資料	図書、パンフレット、文献、年表など
⑥	その他	①~⑤に分類できない資料

中でも、「地図」は社会科固有の資料である。「社会編」に示されている技能に関する目標から資料に関する内容を抽出すると、表2のようになる。表2からも分かるように、社会科入門期から地図を活用することが求められる、学年が進むにつれ資料の種類が追加される形となっている。

そこで、本稿では、社会科入門期の子どもに、地図活用力の育成と社会認識形成をめざした授業実践とそこから抽出された理論を提案する。

表2 技能の目標に見られる資料の種類⁶⁾

学年	技能に関する目標内容にみられる資料
第3学年及び第4学年	地図帳や各種の具体的資料
第5学年	地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料
第6学年	地図帳や地球儀、統計や年表などの各種の基礎的資料

2 地図活用力の育成をめざして

(1) 社会科における地図の活用

北俊夫(2008)は、「能力における重点指導事項」の中でも「地図」の活用に期待される学習活動について、表3のように例示している。表3に示されているように、社会科授業において地図を活用する学習活動を展開することで、様々な能力が育成される。例えば、地図を作成することで「観察力」が、観察から分かったことを地図にまとめることをとおして「表現力」が、作成した地図を比較することをとおして「思考力」といった能力が育成されると言える。

表3に示された能力を意識しながら、学習活動の中に地図活用を位置付け、子どもの地図活用力の育成を目指して実践した。

小原友行(1999)は、地図について「地図は各学年の能力に関する目標に掲げられているように、社会生活の様子や、その特色と自然とのかかわりを調べることができる最も身近な資料」⁸⁾と位置付けた上で、「社会科学習における基礎的な資料である地図や統計資料の活用の仕方を学ぶことによって、児童が学び方や調べ方を身に付けることができる」⁹⁾と述べている。つまり、地図をはじめとする資料活用をとおして、学び方や調べ方を習得することができ、「学び続ける子どもの育成」の一端を担うことにもなる。

表3 能力育成に向けた地図活用例⁷⁾

能力	能力の育成にむけて地図が活用される具体的な学習活動
観察力	<ul style="list-style-type: none"> 観察の結果をノートや地図にメモができる。 観察した部分から、全体の様子を推測することができる。
資料活用能力	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決に必要な資料の収集方法がわかる。 さまざまな資料から、必要なものを選択できる。 さまざまな資料から、事実を読み取ることができる。 調べたことを資料にまとめること(資料整理)ができる。 資料の内容を評価することができる。
思考力	<ul style="list-style-type: none"> 二つの社会的現象を比較して、相違点と共通点がわかる。 社会的現象相互間の関連や関係が説明できる。 帰納的思考(具体から一般化)ができる。 演繹的思考(概念の具体化)ができる。 社会的現象の意味や背景などが説明できる。
表現力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えをさまざまな方法でまとめることができる。 目的に応じて、さまざまな方法やスキルを活用した表現ができる。
学び方	<ul style="list-style-type: none"> 教科書、地図帳、副読本などの使用方法がわかる。 見学やインタビュー、観察など地域調査の方法がわかる。 目的に合った調べ方やまとめ方があることがわかる。
言語の能力	<ul style="list-style-type: none"> 調べたことや自分の考えをノートなどに論理的に書き表すことができる。 自分の考えを文章のほかに、イラスト、図表、チャート、地図など様々な手法でまとめることができる。
地図帳の活用力	<ul style="list-style-type: none"> 地図の内容構成がわかる。 地図帳の目次や索引の使い方、凡例の見方がわかる。 地図帳を社会科のほか、さまざまな教科等の学習で活用することができる。 地図帳を日常生活の中で活用する習を身につけている。 教科書や副読本と、地図帳を併用して活用することができる。
地球儀の活用力	<ul style="list-style-type: none"> 地球儀と世界地図との違いがわかる。

(2) 社会科における地図活用力の育成

本稿では、社会科教育における地図活用力とは、地図を描く力と地図を読む力の二つから構成されていると定義する。地図を読む力とは、地図にどのような情報が提示されているのか読み取る力と、問題解決にむけて必要な情報を地図から抽出する力である。つまり、読図力である。

地図を描く力とは、検証過程や観察で分かったことを地図上にまとめる力と観察や資料から読み取った情報を地図に表す力である。つまり、描図力である。

子どもにこの地図活用力を育成するには、地図を描く力(描図力)と地図を読む力(読図力)の二つを鍛えていくことが重要となる(図1)。子どもの地図を描く力が高まれば、地図を読む力も高まる。また、地図を読む力を高めていく中で習得した知識を活用して、よりよい地図を描くことも可能となる。

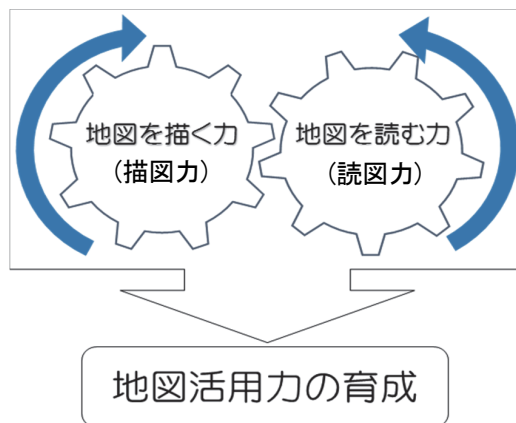


図1 地図活用力の構造

図1に示すように、地図を描く力（描図力）と地図を読む力（読図力）は、相補関係にあると言える。意図や目的に応じて地図を描くためには、地図にどのような情報をどのように組み込むとよいか、地図を描く方法知を子どもに習得させる必要がある。描図力が子どもに育成されれば、地図から情報を読み取るための視点も習得され、社会のしくみが分かる（社会認識）ようになり、読図力も高まる。つまり、地図を描く方法知を鍛えることをとおして社会の見方である地図を読み取る視点が育成され、社会認識形成が図られ内容知も習得される。

このように「描図力」と「読図力」は、それぞれが独立して育成されるものではなく、相互に連動し、地図活用力が育成されることとなる。そこで、本稿では、「描図力」を鍛える授業実践を紹介し、その理論を提案する。

3 「描図力」を鍛える授業展開

(1) 単元「身近な地域や市の様子」(第3学年)

本稿では、3年生にとって初めての社会科学習となる「身近な地域や市の様子」の単元を取り上げる。この単元では、校区やその周辺の調査、探検が学習に組み込まれていることが多い。この調査、探検を活用して学習を進めることで、地理的位置や地形、土地利用、分布などの社会事象を追究する視点となる社会的な見方を獲得することができる。

(2) 単元の全体計画 (全6時間)

本単元は、第1次～第3次で構成される(資料1)。

資料1 単元の全体計画

回数	主な学習活動
第1次	○ まちの様子を把握しよう 学校の屋上から学校の周りを観察する。 もっと調べてみたいことを話し合う。 地図の利便性を把握する。
第2次	○ 町探検に出かけよう 学校のまわりを観察し、特徴的なものを発見する。 発見したものを地図にまとめる。 探検で分かったことを話し合う。 ○ 出かけていない地域の様子を調べよう 工場見学に出かける際に、バスの中から確認する。
第3次	○ 身近な地域の地図を作成しよう 自分の家から学校までの地図をノートに描く。

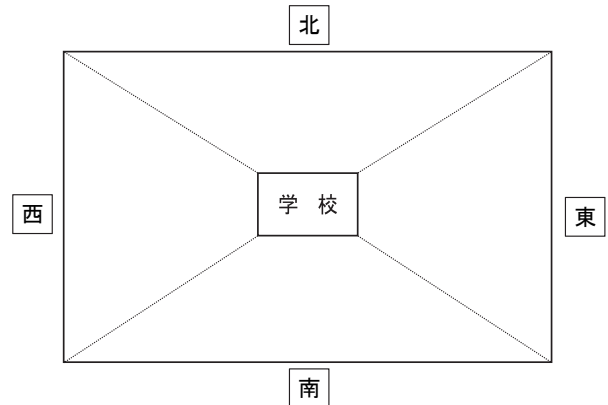
(3) 授業の実際

第1次では、校区を見渡すことができる屋上やテラスに移動し、校区の様子を観察させる。この学習活動のポイントは、子どもが発見した気づき（つぶやき）を授業者が把握することである。例えば、「駅がある北の方には、マンションが多くある」「南の方は、田んぼがたくさんあって、川のようなものがある」「海の方にクレーンのようなものが見える」といった視覚的に把握できたものや、「1号線のそばには、お店がたくさんある」「歩道橋もあるよ」といった生活経験と連動した発見である。また、「ぼくが行った郵便局は向こうだよ」、

「近鉄弥富駅は学校から遠かったよ」、「図書館は大きい建物」といった2年生の生活科でまち探検を踏まえた発言も出てくる。このような発見は、第2次の校区の調査、探検の際に活用することができる。

このように、まず、屋上から校区全体の様子を観察させて、授業者は、子どものつぶやきを把握する。次に、学校の屋上から眺めて見つけたものを探検バックに挟んだワークシート(資料2)に描かせていく。この活動の中で、第一の疑問(「何をどうやって描くといいの?」)が出てくる。

資料2 学校から校区を調査しよう(ワークシート)



子どもから、次々にその疑問の解決策が提案される。「絵で描けばいい」「名前を書くほうが簡単」「名前を省略して書く」などと意見が出てきた。また、「言葉では書ききれない」「もっと分かりやすく書きたい」といった地図を描く上での工夫を求める発見もある。このような発見は、地図記号の学習へと発展していく。

周りの仲間が出した意見をもとに、A児とB児は、資料3に示す地図を描いた。資料3を見ると、子どもがよく利用している公共施設「社教センター」や「児童館」、救急指定病院である「海南病院」などは共通して描かれているものの、A児もB児も距離や位置(方位)は正確ではなく、見つけたものを記載するに留まっている。また、生活経験をもとに、見えなかった建物も方向に合わせて記載しているものもある。特に、A児は建物の絵も描き加えながら作成したため、時間が足りなかった。学級全体の様子としては、この活動をとおして、紙面に表現する難しさを実感していた。

資料3を見ると、実際には、学校の門を出たすぐのところ市の指定文化財である「おみよし松」が、A児(イラスト)もB児(言葉)も、学校から歩いて10分程度かかる「児童館」よりもワークシートの外側に位置付けている。また、県外にある遊園地も学校から一番近い位置に描かれている。このように、「眺めて見つけたものを描こう」と言った指示では、描きたい建物や知らせたい建物などを順に記載する状況であった。このような活動の中で、目印になるものがあるともっと描きやすい、「道路が分からないから描きにくい」といった意見も出された。

教室に戻り、ワークシートに描いた内容を確認しながら、校区観察のまとめを行った。その校区調査のまとめが、資料4に示す板書である。

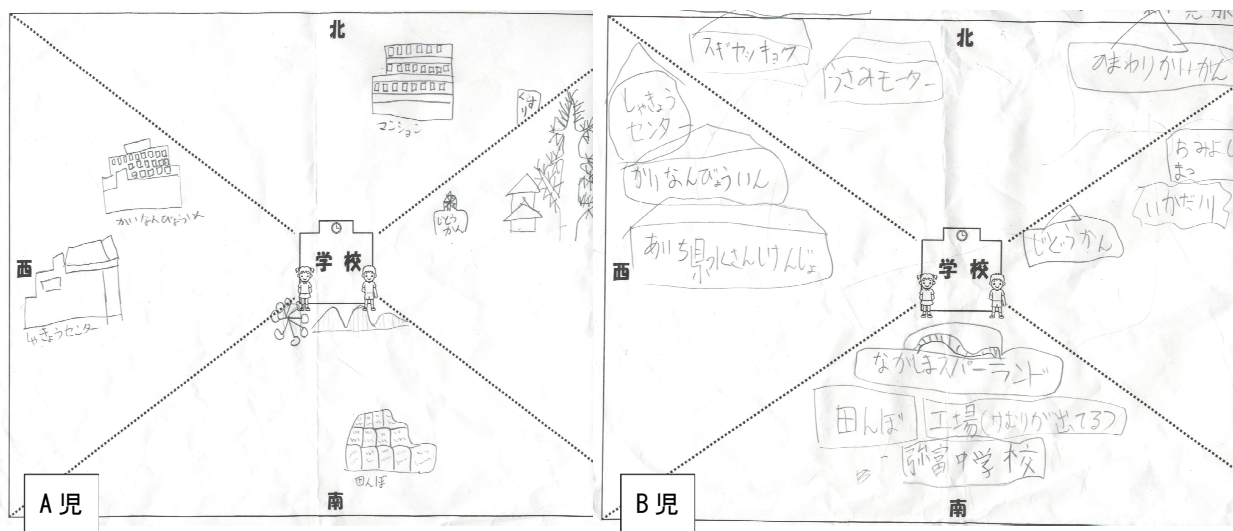
この校区調査のまとめに活用する資料は、授業者が事前に撮影した写真を活用することが効果的である。子どもがまとめたワークシート(資料3)をチェックして、子どもが発見したものを校区に出かけて撮影し、カードに整理しておいた。建物の名前のみを板書に提示するよりも、カードで視覚化させることで捉えやすいまとめとなる。また、他の建物と比較したり、学校との位置関係を確認したりしながら、カードを黒板に提示した。

次に、まち探検に出かけて調べたいことを話し合った。この話し合いの中で、「学校からどれくらい離れているのか分からないし、学校の周りをもっと調べてみたい」、「実際に出かけてここにはないものも見つけてみた

い」と盛り上がり、まち探検の目的(校区の様子を観察し特徴的なものを発見しながら、学校からの距離や位置を把握すること)を明確にすることができた。

探検しながら、地図を描くことや文字を書くことは大変である。最後に、探検に向けて、どんな工夫をしようと地図は描きやすくなるのか確認した。子どもから「地図記号を使う」、「赤青色鉛筆で区別する」、「省略しても分かるような文字を書く」といった意見が出た。子どもの気付きをもとに、学級全体に「みんなはどうですか」「付け足しはありますか」「どうするともっと分かりやすくなると思いますか」など、授業者はファシリテーターとなり、子ども同士の意見をつなげたり、広げたり、深めたりする役を担うことが重要である。このように、授業者は子どもの意見や気付き、つぶやきなどを取り上げながら、学級全体へと共有化を図ることが重要である。

資料3 ワークシートに描かれた地図



資料4 第1次の板書



資料5 まち探検の様子



第2次では、第1次の学習内容をもとにまち探検（資料5）をとおして分かった情報を地図にまとめる活動を行った。まち探検でワークシートに書いたメモをもとに作成した学校周辺の地図が、資料6である。

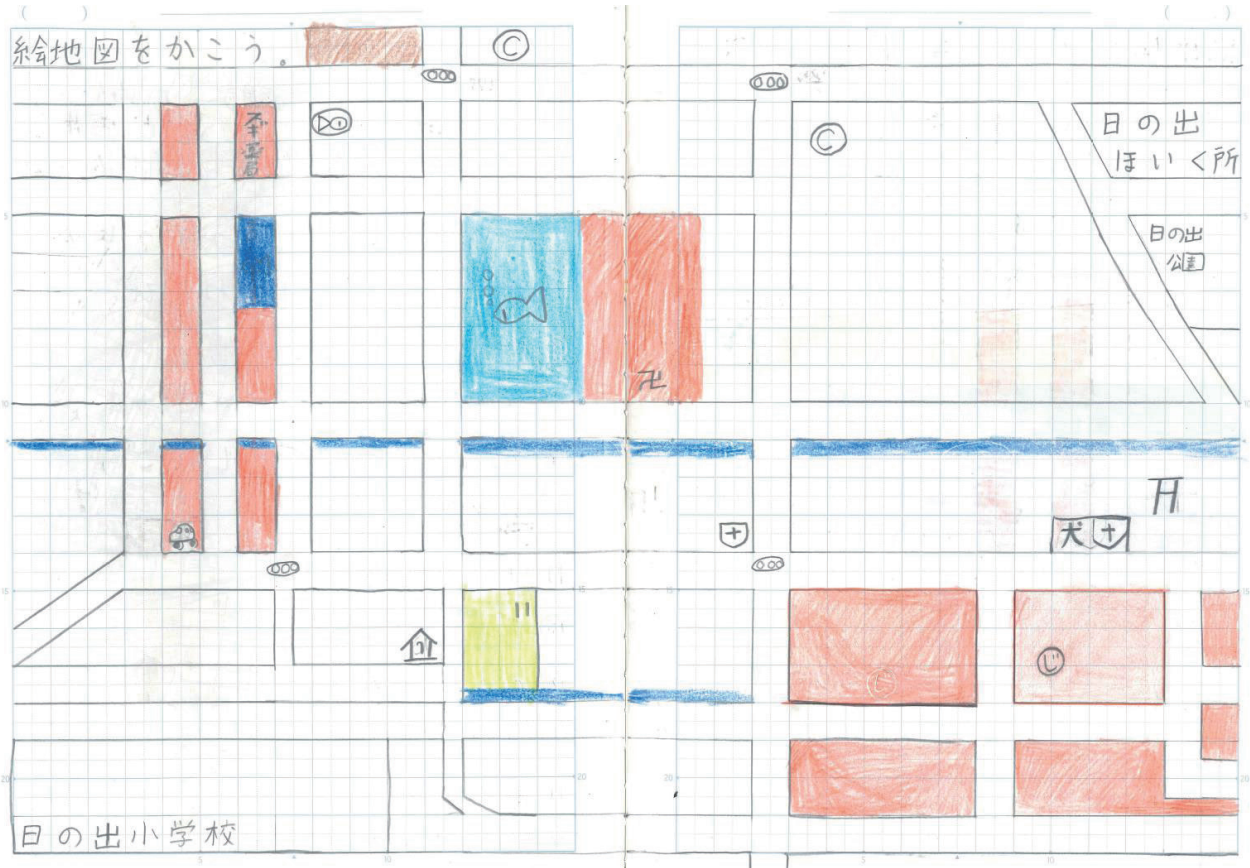
資料6の絵地図を作成したC児は、お寺（卍）や病院（⊕）、老人ホームなどの地図記号を活用しながら描いている。また、地図記号で表すことができない「コンビニ」や「児童館」などは、略文字を使って記入している。信号機は、信号機があることが分かるようなイラストで分かりやすく正しい位置に記入している。金魚を養殖している池は金魚のイラストを加えて青色に、家が多いところには赤色を塗っている。用水が流れているところは青色で示し、工夫しながら地図を作成している。

この地図を「描く」活動をとおして、地図の利便性を実感したり、地図を色分けして示す理由を把握したりと、「描図力」の育成を図る。

学校の周りの様子を地図に描き、色分けしたりイラストを記入したりする活動をとおして、地図の読み取り方（読図力）も習得される。なぜなら、地図を描いている子ども自身が描図ルールを設定しているからである。

第3次では、これまでの地図を描く学習をとおして習得した知識や技能を活用して「身近な地域の地図」を作成する学習活動を行う。子どもには、「自分の家から学校までの地図を描こう」という課題を提示した。毎日、通学路として利用している道路については、最後に赤鉛筆でたどらせることとした。

資料6 C児が作成した地図（学校の周りの様子）



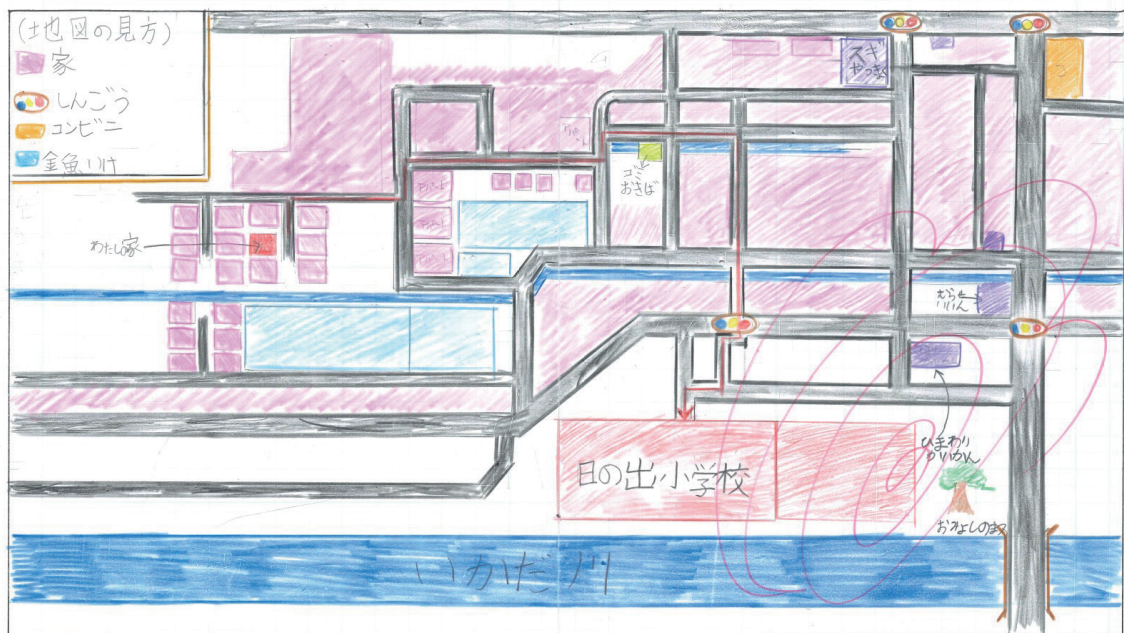
資料7は、校区の北西に住むA児が作成した地図である。資料8は、校区の北東に住むB児が作成した地図である。これらを作成する際に参考にした地図は、「市街図」である。子どもは、市街図に示されている「凡例」にならって、「地図の見方」とタイトルをつけながら地図を描いていった。なお、この地図を描くために、最初に学校の位置を決定させてから描くように指示をした。このような指示を出した理由は、校区は東西に広がっており、紙面を有効に利用させるためである。校区が南北に広がっている場合については、紙面を縦長で利用するとよい。

A児が作成した地図を見ると、自分の家の周りは、路地まで正確に表現され、住宅は一軒一軒、形が描かれている。また、道路の長さも実際の距離と同じような割合

で描かれている。このA児の地図から、社会科入門期でも、詳しく描く部分が必要な理由（自分の家の位置が何軒目にあるのか分かるようにするため）や、限られた紙面に距離を表現するために、学校のすぐ北にある信号までの距離を基準に道路の長さを決定することができた。

B児が作成した地図を見ると、住宅と畑が混在している土地は、斜線を活用しながら色を重ね合わせて、上手に表現している。実際にカーブしている道路についても、その様子を正確に描いている。また、この作図をとおして、大きな道路と交わるところに信号が設置されていることに気付くこともできた。このことから、社会の仕組み（「人々が安全に通行できるように道路には信号がある」）を把握させ、社会認識形成が図られているこ

資料7 A児が作成した「身近な地域の地図」



資料8 B児が作成した「身近な地域の地図」



とが分かる。

単元のまとめの学習活動の一つとして、地図活用力の育成を図る地図を「描く」活動を組み込むことが重要である。そして、子ども同士が作成した地図を見せ合う活動をとおして、自分と同じ表現方法や異なる表記方法に気付きながら、地図を読む読図力の育成をめざす。

資料9は、これまでの学習で習得した知識を活用してA児が描いた「住んでみたい私のまち」の地図である。

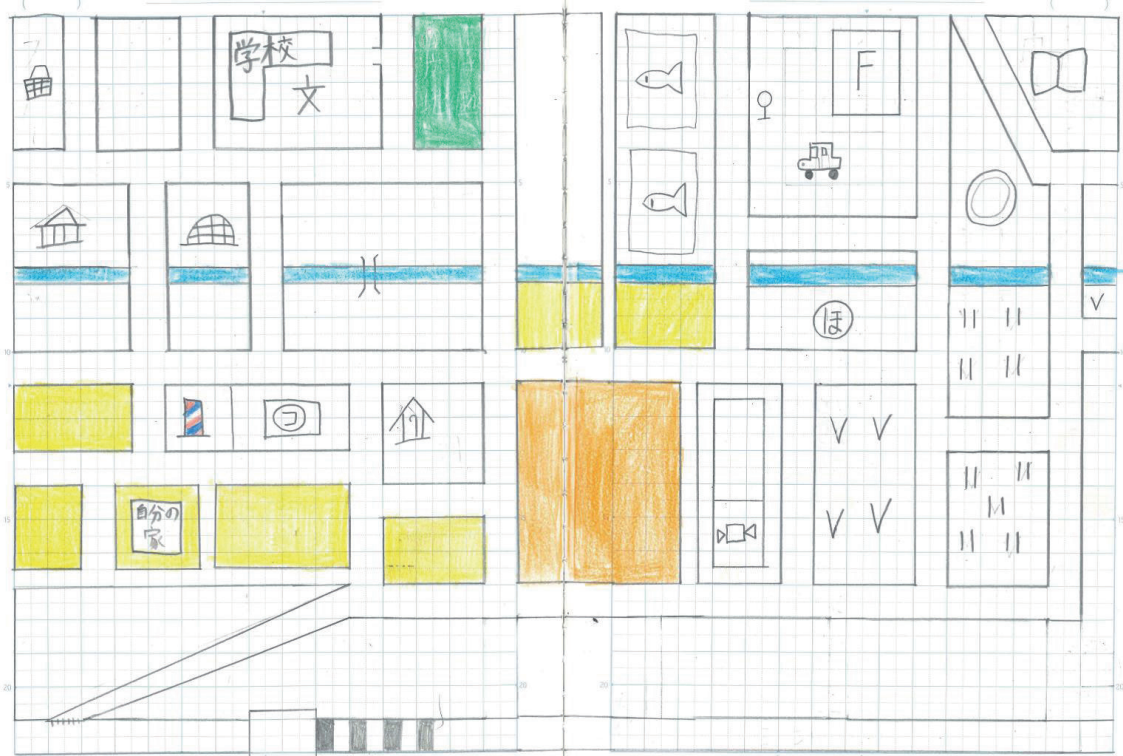
A児が使った地図記号は、「市役所」「図書館」「博物館」「学校」「保育所」といった公共施設が中心で、「田」や「畑」も加えられている。さらに、A児のイラストで、自分たちの暮らしを支えるスーパーやコンビニ、理容店、金魚

池なども描かれている。用水沿いに田が描かれているのは、フィールドワークをとおして、田のそばには水路が必ずあることを把握したためである。

また、学校の周りにも色々な施設が配置されている。見学に出かけて調べたり、たくさんお年寄りと交流することができたりするためと説明している。

「身近な地域の地図」から「住んでみたい私のまち」を描くことへと発展させることで、地域を見つめる視点をもって、よりよいまちづくりを考えるきっかけともなった。今後も、地図を描くことが楽しくなる課題を提示することが重要である。

資料9 A児が作成した「住んでみたい私のまち」



4 教科書を活用して概念化を図る学習活動

本実践のフィールドワークをとおして、子どもは次のことを把握することができた。

(1) 社会事象をとらえる視点となる社会的な見方（立地条件と地理的位置）

「弥富駅や国道1号線のあたりにはお店がたくさんあること」や「筏川や用水が多くある南側には田んぼが、海の近くには工場が多くあること」、「まちの西側には、公共施設である市役所や図書館、資料館、社教センターが集まっていること」、「東の方には、新しい家が多いこと」など学校を中心にまちの様子を把握することができた。

つまり、子どもは地域教材をとおして、社会的な見方の視点となる立地条件や地理的位置をふまえながら「海に近いところに工場が集まる理由（輸送に便利であるこ

と）」や「駅の周りにお店がたくさん集まる理由（駅を利用する人が集まってくるため集客ができること）」について、具体的に理解し、社会認識形成が図られた。

(2) 社会認識となるまちの構成要素

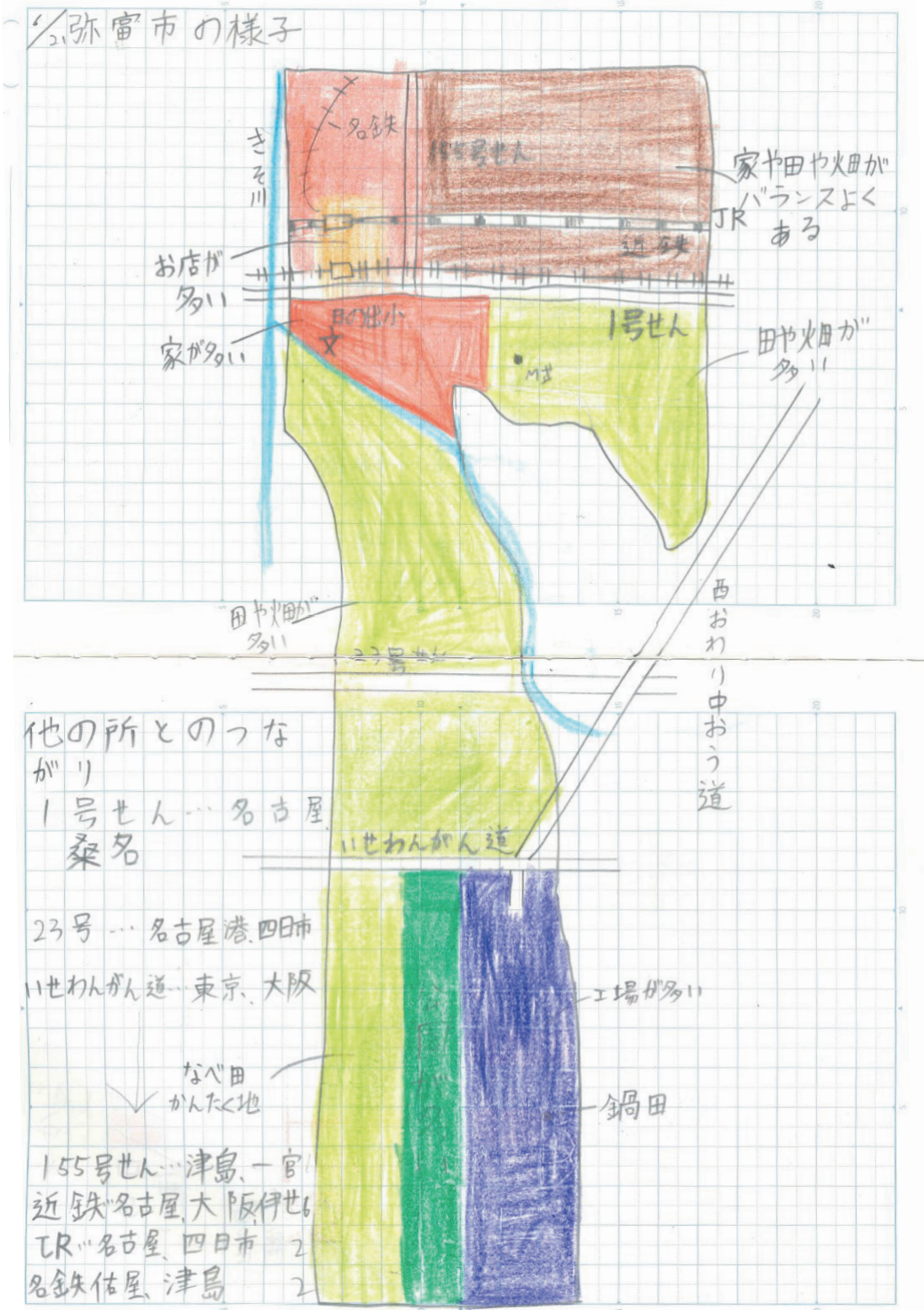
学習のまとめとして、習得した社会的な見方を活用しながら、教科書に提示されている他地域の地図と子どもが生活している地域の地図（副読本）を比較し、共通点を発見する学習を組み込むことが有効である。まちの構成要素は、①公共施設をはじめとする「人々の生活を支える場所」があること、②商店をはじめとする「人が集まる場所」があること、③工場をはじめとする「人々が働く場所」があること、④駅をはじめとする「まちと他地域を結ぶ場所があること」、⑤住宅をはじめとする「人々が過ごす場所」があること、などである。

自分のまち（資料10）と教科書で提示されている他

地域の様子を比較させる。その中で、まちの構成要素をとらえ、立地条件（輸送手段である幹線道路の近くには工場が多い、お店は多くの人が集まる駅の周辺に多い、田や畑は用水や川のそばに広がっているなど）につい

て、概念化を図る。なお、概念化を図る学習活動においては、習得した知識を活用することができ、子どもの社会的な考え方を鍛えることにもつながる。

資料10 B児が描いた市の様子



5 カリキュラム編成の工夫

小学校学習指導要領の改訂により、本稿で提案した「身近な地域や市の様子」の授業数は削減された。そのため、学区に出かけて調査を行う時間は、確保することが難しい。そこで、「地域の生産や販売」の学習に「身近な地域の様子」を組み込みつつ、働く人々の様子を調査・見学に出かけるカリキュラム編成が効果的である。

なお、小学校第1, 2学年の生活科の学習においても、「まち探検」を行っている。「小学校学習指導要領解説生活編」において、「生活科の学習内容や方法が、第3学年以上の教科等にも密接に関連していることを理解する必要がある。(中略：筆者)例えば、身近な地域の様子を絵地図に表したり、公共施設を利用し、学んだことを関連付けて、身の回りにはみんなのものや場所があると気付いたりすることは、社会科の社会的事象の見方・考え方の基礎につながっていく。」¹⁰⁾と述べられている。

このことを踏まえて、社会科学習入門期では、生活科で学んだことを振り返る活動を組み込みながら、学習を進めていくことが不可欠である。まちの様子は、授業者

よりも子どものほうがよく分かっているということ为前提で進めると、子どもから次々とまちのひみつが発表される可能性がある。子どもの生活経験やこれまでの学習内容を最大限に引き出すことができるような授業構成を構築するとよい。そのためには、第2学年でどのような学区探検が行なわれてきたのか把握することが最低条件である。第1・2学年の生活科のカリキュラムを校内の電子ファイルに記録し、そのファイルを授業者が確認しながら授業を計画していくことも生活科からの接続を意識した一つの手段である。

小学校6年間で子どもが地図から認識する範囲は、図2に示すように同心円的に広がっていく。しかし、各学年で活用されているそれぞれの地図は、地図に描かれる地域の範囲が異なるものの、特徴や特色を表す役割を果たしているといった点では普遍的な内容である。だからこそ、生活科での学習を生かしながら、社会科入門期の第3学年における地図学習は、「描図力」や「読図力」を鍛え地図活用力を育成し、地図の見方を子どもに習得させる重要なものとなる。



図2 地図の活用範囲

6 社会科学習入門期における地図指導の理論

実践で明らかになった子どもの姿や実践をとおして論じてきたことを整理すると、社会科入門期における地図指導の理論は次のようになる。

(1) 地図の利便性を認識させること。

地図には、多様な情報が組み込まれており、問題解決を目指して必要な情報を地図から収集することができなければ、解決策を導き出せない。また、地図に示されている情報を正しく読み取ることができなければ、災害時にその地域の危険性を把握することができず、自然災害によってもたらされる被害が拡大する可能性がある。

社会科入門期における地図指導において、地図の利便性を把握させるとともに、地図の役割について理解させることが重要である。

(2) 地図活用力を育成するとともに社会認識形成を図る学習活動を展開すること。

社会科教育における地図活用力は、描図力と読図力で構成されている。社会科教育固有の資料である「地図」を活用するためには、子どもに描図力と読図力を育成することが不可欠である。地図を描く力(描図力)と地図を読む力(読図力)は、相補関係にある。意図や目的に応じて地図を描くためには、地図にどのような情報をどのように組み込むとよいか、地図を描く方法知を子ども

に習得させる必要がある。描図力が子どもに育成されれば、地図から情報を読み取るための視点も習得されることとなり、読図力も高まる。このように「描図力」と「読図力」は、独立して育成されるものではなく、相互に連動し、地図活用力が育成される。

地図を描く方法知を鍛えることをとおして社会の見方である地図を読み取る視点が育成され、社会認識形成が図られ内容知も習得される。地図に提示する要素を検討しながら、社会のしくみが分かる学習活動を展開することが重要である。

(3) 地図を描くステップを設定すること。

実践では、「屋上から眺めて見つけたものをワークシートに描く」→「学校の周りの様子を地図に描く」→「身近な地域の地図を描く」→「住んでみたいわたしのまちを描く」の4段階のステップを設定している。

この4ステップをたどることで、地図記号を利用することや土地利用を色分けで示す工夫、方位の正確さ、ルートマップの原型ともなる正しく道のりを表す方法等を習得することができる。資料3と資料7・8を比較しても、地図の構成要素である方位や距離は正確に描かれており、色分けや地図記号を活用して、視覚的に分かりやすくする工夫ができるようになっている。最後の段階では、まちの構成要素を意識しながら地図を描き、

子どもにとっての理想的なまちを表現している。このように発展させることで、子どもが地域を見つめる視点をもって、よりよいまちづくりを考えるきっかけとなる。

(4) フィールドワークを組み込んだ学習活動を展開すること。

社会科入門期の子どもは、これまで生活科で学んだことが基盤となる。そこで、屋上から眺める活動や実際に学区に出かけて観察、調査する活動、通学路を毎日歩く中で細部を見ながら新しい発見ができるような活動を組み込むことが重要である。フィールドワークをとおして、日常生活の気付きを想起することもできる。周りの仲間の気付きやつぶやきから、まちをとらえる新たな視点を獲得することにもつながる。

7 成果と課題

本稿で提案した実践をとおして明らかになった成果と課題は、次のとおりである。

本稿で提案した地図活用力の構造をもとに、子どもに「描図力」と「読図力」を鍛えることで、子どもが地域の特徴や立地条件をとらえる視点となる社会的な見方が習得されることが明らかとなった。この社会的な見方は、社会事象をとらえる際に活用される視点で、子どもの社会認識形成を図るためには不可欠なものである。つまり、地図活用力を育成することで、子どもの社会認識形成が目指されることが分かった。

また、社会科入門期の地図指導に焦点を当てた実践をとおして、子どもの地図を描くステップが明らかとなった。本稿では、4段階のステップを提案している。各段階で、子どもに地図の利便性や地図の構成要素に気付かせている。この4段階のステップを子どもにたどらせることで、子どもの地図活用力が一層高まるものと考えられる。

本稿は、社会科入門期における地図指導に焦点を当てたものである。今後の研究において、子どもが入門期に習得した地図活用力をどのように活用し、社会認識形成を深めていくとよいか、明らかにすることが課題である。

註・引用・参考文献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説社会編」日本文教出版 2018.2 p.143
- 2) 前掲書 p.35
- 3) 文部科学省『情報活用能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントのあり方と授業デザイン』p.11 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/01/28/1400884_1.pdf (最終閲覧日 2020.7.12)
- 4) 前掲書 p.35
- 5) 社会科教育で活用する資料の種類については、次の4点を参考に作成筆者
 - ・廣岡亮蔵「資料批判を裏打ちとして」『社会科教育』No.163 明治図書 1977.10 p.5

- ・藤田詠司「資料活用能力」森分孝治片上宗二編『社会科重要語句 300 の基礎知識』明治図書 2000.4 p.115
 - ・岡崎誠司「現物資料」森分孝治片上宗二編『社会科重要語句 300 の基礎知識』明治図書 2000.4 p.291
 - ・佐長健司「年表」森分孝治片上宗二編『社会科重要語句 300 の基礎知識』明治図書 2000.4 p.293
- 6) 前掲書 1) pp.25-26 をもとに作成筆者
 - 7) 北俊夫「『重点指導事項』とは何か 各学年の重点指導事項一覧」北俊夫編『新学習指導要領の指導事例 新小学校社会科・重点指導事項の実践開発』明治図書 2008.12 pp.21-23 をもとに作成筆者
 - 8) 小原友行『学習指導要領早わかり解説 小学校新社会科授業の基本用語辞典』明治図書 1999.12 p.153
 - 9) 前掲書 p.154
 - 10) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」東洋館出版社 2018.2 p.83
- * 本稿に掲載されている子どもが作成した地図や写真については、勤務校から使用について許諾を受けている。